

えんちょう通信

No.106

令和5年9月22日
福島市立清水幼稚園
発行者 佐藤一男

「一番大事な国語の力は 何ですか？」

7月にスタートした3歳児の定期的な預かり保育も、11回目になりました。

子どもたちは、週に1回ですが毎週幼稚園に通うのをとても楽しみにしてくれているようです。

そして、幼稚園に来るといろいろなことを楽しそうに話してくれます。

先日のことです。子どもたちが、ブロックで家を作っていました。その中におもちゃの動物を入れて遊んでいます。動物に餌や水をあげて、とても楽しそうです。



「これは何？」ときくと、「動物園だよ。」と教えてくれました。

すると、そばにいた男の子が、「ぼく、本物の動物園に行ったよ。」と話し始めました。

「ライオンはいなかった。」

「ゾウはいたよ。」「パオーって。」

「ゴリラもいたよ。」と言って、握った手で胸をポンポンとたたいて見せてくれました。

3歳の子が、家族で出かけて、どんなものを見て来たのかをこんなにもきちんと「言葉」で伝えられるのです。わたしは、びっくりしてしまいました。あとでその子のお母さんにきいてみたら、夏休みに秋田県にある動物園に行ってきたとのことでした。

3歳の子が、体験したことをきちんと「言葉」にできるのです。こういうふうに自分の体験したことを「言葉」にすることで、体験は身体につながった知識となります。そういう知識は忘れないでずっと心に残っていて、そしていつでも取り出せる「生きた知識」になるのだと思います。

詩人の谷川俊太郎は、若い教師に「いまの子どもたちに、一番大事な国語の力は 何ですか？」と質問されて、次のように答えたと言います。(『一冊の本』1月号 2023.1.1 朝日新聞出版)

「朝、家を出てから、学校に着くまでであったこと、見たことをきちんと言葉で伝えられればいい。」

わたしたちは、本を読んでマーカーで線を引いたり、付箋をはったり、ちょっとメモをとったりして、書いてあることを一生懸命頭に入れようとします。わたしたちはどうしても「インプット」することが、「学ぶ」ことだと思いがちですが、さらに「深い学び」「主体的な学び」には、自分で体験したこ



とを言葉にして人に説明するというような「アウトプット」がとても大切だと言われています。

幼稚園には話したくなる友だちや優しく受け入れてくれる先生がいます。そういうみんなが集まる、安心できる場所があると、子どもたちの「言葉」はどんどん生まれてくるのだと思います。

そういう子どもたちの「言葉」を丁寧に聴いてあげたいなと思っています。